

# 非悪心童 物語

足立巻一  
え・津高和一

ほくたちは「悪童」ではなかった。  
しかし「善童」でもなかった。

## 虹 6

ここに一枚の写真がある。

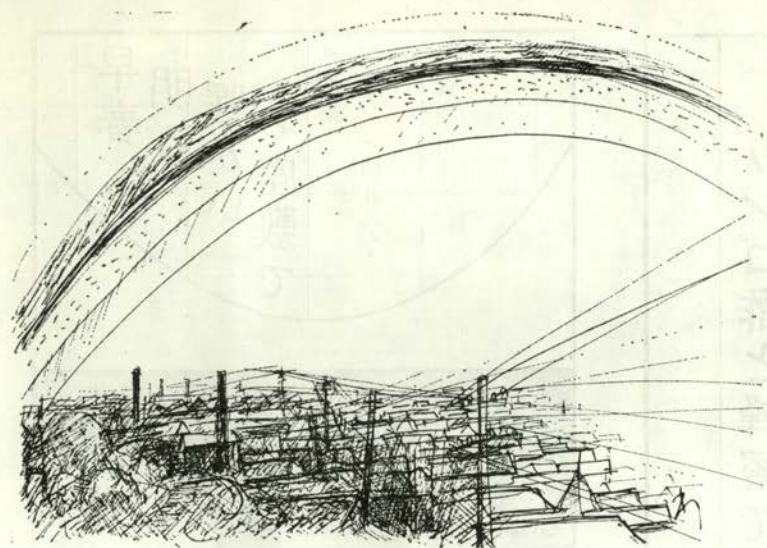
モンツキ、ハカマを着こみ、机にむかっている。机のうえには白紙がおいてあり、大きな筆を持っている。

六歳くらいであろうか。――坊主あたまをふりたて、つぶらな目を見ひらいている。じぶんながら、ちよつとかわいらしいと思う。とともに、もの悲しくもなる。ほくにとって、こんな幼年があったのだ。とすると、ずいぶん生きさらばえたものだ。

この写真は、文豪の幼年時代とすれば、まことに格好がよろしい。しかし、そのなれの果てが無名の売文者だから、話はあわれである。電気ゴタツに背をまるめ、エンピツでつまらぬ原稿を夜どおし書きなぐっていると、ふとこの写真が意識をよぎることがある。そのときは、きまっつてうらぶれた吐息がもれる。第一、幼年のほくは悠然とかまえている。もちろん、原稿のしめ切りなど念頭に一切なかったからだろう。

ほくのじいさんは、生活能力は皆無の、ドモリの大へんな変人であったが、漢学者であり漢詩人であった。「みんな死んでもうても、わしはいっこうに悲しうはない。本さえあればええ」

ばあさんにいつかそういったそうである。



その言い草でも、じいさんが本好きの変人であることはわかるが、かならずしもそのコトバのとおりではなかったようである。ふたりの男の子を生むと、その教育には異常な情熱をかけたふうがある。弟のほうが中学生時代に死ぬと、兄に全力をそそいだらしく、長崎有数の旧家であった家財すべてを売って京都帝大へ進学させた。そのころでは、長崎市で大学に進んだ人は数人であったというから、熱の入れようは察しがつく。ところが、その息子は大学をやっと卒業して、二六新報の記者になり、結婚し、初孫をつくったと思うと急死してしまう。生活の方途もうしなう。悲惨な人生であった。

後年、ぼくが中学に進んだとき、郷里の長崎からヤナギ行李が突然に送りとどけられ、あけてみると、すべて父祖の書きしるしたものの、スクラップ・ブック、アルバムであった。

書きものはみんな和綴りに製本されている。それには、父のころのころの作文から手紙、ハガキまでがごまかく分類してとじこんであった。スクラップ・ブックには父が書いた文章ばかりが張りこんである。

父には『鎖国時代の長崎』と題する、かなり長大な著述原稿がある。これはその行李にははいつておらず、ずっとのちに『長崎市史』の編者古賀十二郎翁をたずねてゆくえをたずねたら、紙くず屋から買って持っているということだった。徴兵検査のために長崎に帰った昭和九年のことである。

「あのころではすぐれた研究ですばってん、いまではあのまま出版できませんばい。注をうんとつけんと……」古賀翁はむかしの役者の藤堂国典のような顔をし、目をむいていった。

それでも、ぼくは安心するものがあつた。ところがそののち、日華事変が始まり、進行し、ぼくも二回にわたって召集を受け、戦争がすむと身边に激変がつづいた。古賀翁もなくなられた。

ぼくがやっと『鎖国時代の長崎』をはじめて見たのは

昭和四十年の夏、長崎図書館の閲覧室においてであった。むしあついで日中で、アブラゼミが鳴きだしていた。

古賀翁がなくなれると、その蔵書は古賀文庫として長崎図書館に収められ、『鎖国時代の長崎』もそのなかにふくまれていたのだ。

借りだすと、シミやよこれがひどかった。

ぼくは読み進むうちに、内蔵がひきしぼられていくのをおぼえた。

父の著作にもかかわらず、文字はすべてじいさんが書いているのだ。

その「凡例」はこう始まっている。

「一、著者京都法科大学に在りて池辺義象先生の日本法制史講座に侍せし時、徳川時代に於て長崎に発布せられたる法度に就き研究せんと志を起せしが、之を為すに就ては鎖国時代の長崎を知るべき必要を生じ、終に本書を著すに至れり」

そうして「凡例」は八カ条におよんで「明治四十三年七月二十日、洛東高台寺塔頭玉雲院の寓、雲峰空を庄する処に於て孤川生しるす」と書かれている。孤川は父の号である。

ところが、それにつづいて「凡例」は十二カ条まで書かれている。

「九、四十三年七月中、著者洛を去て東上し、幾くもなく二六社に入り、操觚の余暇、都下の各図書館に就き、又は他の方法にて長崎に関する未見の群籍を渉獵し、更に蠶身翁に陪して熱海に坐湯し、日夕膝を交へて未開の四事を聴取し本稿に改訂補正を加へ己に九分を成せしに、大正二年十月、著者俄に虹滅し去る。爾来約二歳、予その篋に遺せし劄記を綜合し、漸く十分の完稿を見るに至る。然れども、其の劄記は或は半ば消滅せる鉛筆字、或はノートの断片等なるを以て定めて誤謬多からん。誤謬の責は予に在り。要するに起草より完尾まで五年十一月を費し、父子の心血を注ぎ稿を更むること四回に及べり」

つまり、父の遺稿を祖父がまとめて完成し、浄書して  
いるのである。そして、その著作は五年十一カ月をか  
け、心血を注いだというのだ。

「十二、著者跋涉を好み、足跡殆んど海内に遍ねく、紀  
游の詩三卷あり。今その中より諸名家の評贊せるものを  
抜き、孤川懐古百詩と名づけて本著の尾属とす。読者幸



わ

三つ子のタマシイ百までという、初志まこと  
にけなげにしてその姿やよしである（津高）



いに蛇足視する勿れ。大正四年九月十六日、東京府下豊多摩郡大久保百人町の栖、郊虫秋を警する処に於て父敬亭子補記す」

敬亭とは祖父の号である。

父は旅行が好きで、ほとんど全国を歩いて漢詩をつくり、それを著作の末尾につけたというのだが、これは散逸して、ない。

じいさんが『鎖国時代の長崎』を完了した大正四年、ぼくは満二歳三カ月であり、記憶にあるはずもないが、この「凡例」を読み終わったとき、くらいランブのしたで息子の遺稿をたんねんに毛筆で書きついでいるじいさんの顔が見えた。眉が濃く太く、目がギョロリとして鼻梁は高い。いつも白髪まじりのかたい不精ヒゲが頬にさかだっている。その顔に深い影をさざみこみ、目を充血させたようにして、関節のふとい指で、一字一字彫りきざむようにして書いたのだろう。

ぼくは、祖父をあわれに思った。

そんなじいさんの思いが、ぼくの大筆を持つ幼年の写真にもあらわれているような気がする。

父の死後、生活は苦しかったはずなのに、ぼくの写真是毎年正月か誕生日かにかとうつしたらしく、それが美濃紙の手製のアルバムに貼ってあり、筆を持つのもその一枚なのである。

ぼくの巻一という名も、じいさんが二六新報社主秋山定輔に『論語』巻一を教えていたときに生まれたのでその名づけたそうだが、一郎や一夫でなく、書物をもって長子をあらわしたところは、なかなかいい感覚だと感謝している。やさしい文字ながら、意外に同名がないのである。それも同名をおそれてか「ケンイチ」とよませた。もつとも、これはまともに読んでくれる人がほとんどなく、小学校以来陳弁するのにくたびれた。たいてい、カンイチである。マキイチというのも多い。先輩の詩人能登秀夫さんらはマキイチでないと感じが出んというし、「どんな字を書きますか？」という問いには「巻

きずしの巻き」と答えることにしている。これはいささか品がない。

じいさんは父にもこどものときから漢字を仕込んだらしく、父が漢詩文を残したのもそのせいであろう。ぼくも小学校にはいらないうえから、『論語』の素読を受けた。一字も読めないのに、『論語』を机のうえにひろげ「子ノタマワク……」とじいさんのいうとおり、声をあげた。じいさんは細い棒で、一字一字をおさえて読み、ぼくはそれにならう。

それから、じいさんはぼくに「亭川」という号をつけてくれ、そんな文字を刻んだ大きな印をつくってくれた。自号の号の敬亭と父の孤川とを一字ずつとって合わせたのである。それで、小学生の上級になって詩や短歌を投稿しはじめたころには、亭川と書いた。大正末年ごろ、『不思議の国』『美談』『少年文壇』などという雑誌があつて、こどもの投書のをせしていたが、その詩、ものは付、冠句、童謡に「神戸市下山手通一丁目、足立亭川」というのがかなりのついでに書かれている。

つまり、なにもわからないぼくに大きな筆を持たせて写真をとったり、号までつけたというのは、じいさんが父で満たされなかつた思いのすべてをぼくにこめていたのだろうと思う。ぼくは、心底、そんな祖父をあわれに思う。ただ、肉身というだけでなく、一個の人間として。

ぼくが『鎖国時代の長崎』の「凡例」で、とくに胸を打たれたのは「虹滅」という字句である。「著者俄に虹滅し去る」——なんと突き刺すように悲痛なコトバだろう、と思う。「字源」を引いてみた。ない。熟語としてはないのだ。あるいはほかの字典にはあるのかもしれない。また、かなり用いられた熟語かもしれない。しかし、ぼくには祖父の造語のように思えてならない。

たしかに、祖父にとって父は虹のように滅んでしまったのである。そして、ぼくにとってはその祖父も父も虹のように消えてしまった。

(つづく)

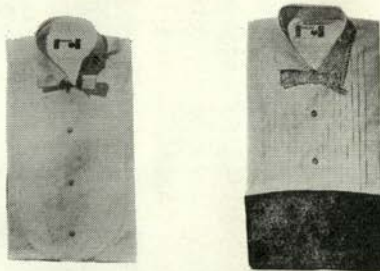


ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを!

## 三恵洋服店

元町4丁目 TEL ☎ 7290

KOBE  SHIRT



よろずの襟衣縫上處

## 神戸シャツ

神戸店-神戸大丸前 33-2 1 6 8  
 東京店-東急日本橋店1階 211-0511 内線219  
 東急渋谷本店6階 462-3433



世界の品々は  
 サノへでお選  
 びください。



元町2丁目  
 ☎ 4707~8



高級紳士服専門店

## 神戸テーラー

さんちかメンズタウン TEL ☎ 0388  
 生田区北長狭通2 (阪急西口) TEL ☎ 2817-3173

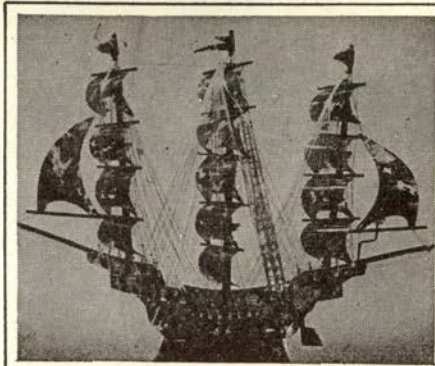


Mr. Kent  
came to Kobe  
流行に左右されない  
本来のオシャレ  
それがKentです  
シックな  
スコッチ風の店舗  
それがFunakiyaです

オシャレ洋品の店

**フナキヤ**

元町3 TEL<33>3617



センスあふれる  
べっ甲専門店

**太田 鼈甲店**

元町1丁目 TEL ㊦6195



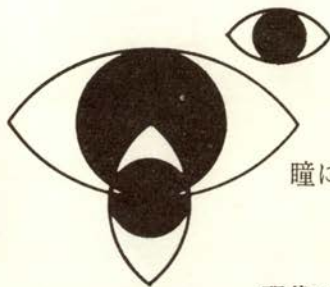
あらゆる体型に  
フィットする  
お誂えシャツ



紳士洋品の店

**千穂 庵**

元町4 TEL ㊦6959



瞳に美しさを保つ  
スポーツに  
美容に  
現代の科学が生んだ  
コンタクトレンズ

日本コンタクトレンズ協会会員

**国際コンタクトレンズ研究所**

神戸市灘区御幸通八丁目九ノ一 (三宮駅前)  
神戸国際会館内 TEL (22) 8161・(23) 2570

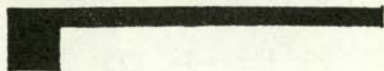


創作ハンドバッグ  
工芸品 ORIGINAL

神戸 ■ 元町

ACCESSORIES

イクシマヤ



TEL. (33) 2415・2416



ポウヤの夢を  
おもちゃの  
カメラで!!



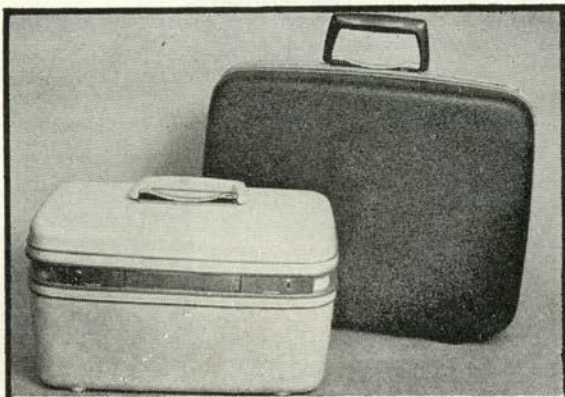
おもちゃの  
カメラ

元町 3 丁目 ☎ 0090

元町 1 丁目 ☎ 0768

三宮センター街 ☎ 4969

さんちかタウン ☎ 4045

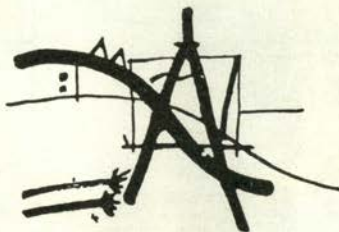


大上靴店・いなみ

元町通 1 丁目 TEL 33・3962

さんちかメンズタウン TEL 39・4627

額縁絵画・洋画材料  
室内工芸品



末積製額

三宮・大丸北  
トア・ロード  
☎1309・6234

The  
Casmopolitan  
Valentine F. Morozoff

コスモポリタン  
チョコレート・センター

神戸本社	神戸市生田区三宮町1丁目170	電話 33-5304
神戸直売店	神戸市生田区三宮町1丁目	電話 33-1217
大阪堺筋店	大阪市東区淡路町2丁目	電話231-6979
大阪心斎橋店	大阪市南区安堂寺横通4丁目	電話251-4182
東京銀座店	東京都中央区銀座8丁目	電話571-2303
東京新宿店	東京都新宿区角筈1丁目 新宿ステーションビル地下2階	電話352-2436
東京有楽ビル店	東京都有楽町 有楽ビル	電話213-2821
東京国際ビル店	東京都丸ノ内 国際ビル	電話212-3746



ご贈答に風味豊かなカステラ

長崎堂本店

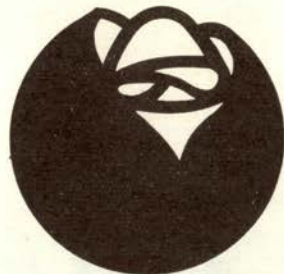
本店=大橋町5大五ビル (61) 0553-4  
 新開地店=松竹座前 (56) 2423  
 元町店=元町 6 (34) 4130  
 さんちかスイーツタウン (39) 3625



亀の井龜井堂本家

神戸三宮トーアロード  
 本店 33-0001  
 電話 33-1616  
 さんちかスイーツタウン  
 電話 33-6532

神戸っ子のみんなに愛される落ちついた喫茶店



ai

TEA ROOM

喫茶 愛

★神戸・元町本通元一ビル2階 TEL (32) 0958



新 播 HARRISWIN



新古美術の店

**新 播** はりしん

元町通3丁目  
TEL 33-2516

おすし てんぷら

栄 彌



本店 大丸前・三宮神社東  
TEL 5577  
③③

支店 さんちか味ののれん街  
TEL 5677  
③⑨

(毎週月曜日休み)

営業時間  
A. M. 11.30~P. M. 9



洋酒の店

**OK**

小川 深雪  
阪急西口下る京町筋  
TEL <39> 1413



**グラムール**

生田筋・岸ビル地階 TEL 33-4637

SNACK BAR  
マゼラン



生田区加納町4丁目 TEL 39-2366



CLUB 小万

生田新道相互タクシー上る

PHONE : 39—0638  
39—4386



洋酒の店キャンテイ

**Chianti\***

榊 晴夫 TEL(39)3060

213KITANAGASA-DORI IKUTA-KU KOBE



CLUB  
Young Bell

松田 真理子

生田・中山手2丁目89・光ビル1階 TEL 33-3052

# 兵庫の女

武田 繁太郎  
え・松岡 寛一



★あらずし まつをは十五才で広島の家をとりだして鐘紡の女工となり、同じ職場で働いていた安福利市と結婚。共稼ぎのかたわら内職に精を出し、やがて呉服の店かたち屋をもった二人は順調な毎日を送る。

結婚して二十年。あきらめていた子宝にも恵まれた。「南栄商店連合会」の会長に選ばれた年の暮れ、利市は扁桃腺炎に見舞われ続いて急性腎臓炎に襲われた。そして三月下旬のある日、まつをの留守の間に他界。生前の利市の人徳を慕って二百名にのぼる会葬者が本堂をうめた。ひと七日をすますと、勝負なまつをは良人が生きていたときにもまして活発な活動をはじめていた。そしてふと口にした酒の味が忘れられなくなっていた。利市の一周忌が近づくと、まつをはかねてから心づもりになっていた亡夫の墓を建て、あわせて自分の戒名も刻んでもらった。そして参会者に、亡夫に殉ずる妻の気持を披瀝するのだった。一周忌を無事にすますと、まつをは良治を連れて利市の故郷、竹田へ出かけ、安福家の祖先の菩提を弔った。そして良治の素っ気ない態度にふと気づくのがあった。

良治は幼児のころから父親っ子だった。利市は、それこそ目にいれても痛くないというたとえどおりに、この一粒種の息子を溺愛していた。まつをは、店の商売にまけて、ゆっくり良治をいつくしんでやる暇を持たなかった。世間の母親のように、良治には甘い母親ではなかった。

しぜん、良治のほうでも、父親になつたようには、母親には馴染んではこなかった。そとで遊んでいて、近

所の悪童連にいじめられ、泣きながら帰ってきてても、良治は、世間の子供のようには、母親の膝には這いあがらなかった。

「お父ちゃん、」

と、良治の這いあがる膝は、いつも父親の膝にきまつていた。そんな良治が、利市にはまた、たまらなくかわいいたのである。

「さあ、もう泣かんでもええ。お父ちゃんがなんぞええ

もん買いに連れられたさかい、もう泣きやみ」利手は、自分の胸にしがみついて泣きじやくっている愛児の頭を撫でながら、けんめいにあやしつづける。

「お父ちゃんノそんなに甘やかしたら、ろくな子にならしまへん。やめといてノ」

まつをが、みかねてきつい口調で言う。

「良ももう泣きやみなさい。近所の子にいじめられたか言うて、泣いて帰ってくるような子、お母ちゃん、大さらいや。そんなあかんたれで、どないするのん。男の子は、もつと強うならんとあかん」

父と子は、いつも抱きあったまま、まつをに叱られていた。

ただでさえ一人子は甘やかしすぎるきらいがある。良治は父親似らしく、性格が内向的で、ひよわそうな感じであった。将来かたち屋のあとを立派につがせるためにも、もつとたくましい子に育てあげねばならない。

まつをは、いつも切実に感じていたが、子供の目には、やはり、そうした母親の態度は、ひどく情愛のといほしいものとして写っていたのであろう。

しかし、まつをを喜ばせたのは、良治の小学校の成績がよかったことである。

良治の通っていた遠矢小学校は、市電の笠松七丁目の一丁目ほど浜側、ちょうど三菱電機の工場のすぐそばにあった。場所柄、在校生の家庭は、三菱、鐘紡あたりの職工、和田の浜の漁師、沖仲仕、日雇いなど、いわゆる下層階級が圧倒的に多かった。神戸市内でも質のよくない小学校だったが、それでも、良治が入学して、一学期のおわりに、はじめて通信簿をもらってくると、

「まあノ良。おまえ、三番やないか」

と、まつをは目をみはった。当時の通信簿は、学課の成績が甲乙丙丁にわけられ、いちばん下の欄に成績の席順が書きこまれてあった。良治は、各課目とも全甲で、席順は、一年一組五十二名中三番だった。

「良。ようやくたなア。えらいえらい」

まつをは、良治の丸坊主の頭を撫でながら、もう手放しの喜びようであった。

「ちよっとノ吉富はん、それに、新さん、啓吉ッとんノ」

まつをは、店の間にいあわせた一番番頭や小僧たちを呼びあつめると、

「みんな、この通信簿みてノ良は組じゆうで三番や。三番やで」

と、もうだれかまわず、良治の成績のいいことを吹聴したくてならぬ風情であった。

「坊、よう出来まんアノ」

「こら、お母ちゃんになんぞこ褒美買おてもらわんならんア」

番頭たちも口々にほめそやしたが、当の良治は、まるで他人ごとのように、ぼかんとした顔をしていた。小学校の一年生では、まだ席順のよしあしには実感がわかかったのであろう。

それにしても、学校の勉強など、まつをは、いちども見てやったことがなかった。番頭も女中も、家のものはいないが、良治の勉強などに目をむけてやるものはいなかった。良治も、学校から帰ってきて、ろくに勉強している様子もない。騒々しい商店街のなかにあるこの家には、おちついて勉強する雰囲気などあるはずがなかった。それでも、思いがけないこの好成绩であった。

（良治はでける子なんや。生れつき勉強のでける子やたんやノ）

そう思うと、まつをの胸中には、ぞくぞくするような喜びがこみあげてきた。

「良。えらかったなア。入学式の直前になってお父ちゃんが亡くなったのに、ようがんばった。この通信簿、お父ちゃんにひと目でもみせてあげたかったなア。お父ちゃん、どんなにうれしがってやったろか」

母に言われて、良治もさすがにしんみりとした顔にな

った。感情をあまり面にあらわさぬ子だったが、この世でだれよりもいちばん自分を愛してくれた父の死は、この少年の心いつまでも癒しがたい悲しみと淋しさをのこしていたのであろう。

「なあ、良。この調子で、二学期もがんばるんやで」

「うん」

と、良治はうなづいてみせた。

母親を喜ばせた一学期の好成績は、まぐれ当りの出来ではなかったようだ。二学期も三学期も、二年も三年も、良治は、小学校を卒業するまで、毎学期の席順が五番以下にさがったことはなかった。

学年末になると、毎年「優等賞」をとり、「優等賞」の赤い判をついたノートの賞品をもらってきては、いっ

そう母親の相好をくずさなかった。当時の小学校では、各組の五番までの生徒に「優等賞」を与え、つづく七、八人の生徒に「進歩賞」を与えていた。

「さあ。お父ちゃんに見てもらおう」

まつをは、優等賞の賞状と賞品を仏壇に供え、良治をそばにすわらせて、父親に報告させた。

あいかわらず、まつをは、晩酌をたのしんでいた。夕食は、家族じゅうでおなじ食卓をかこむので、まつをははむろん、子供の良治のまえでも平気で銚子を傾けていた。しかし、良治は、そうして酒に浸っている母の姿を、いつも、むつりとおし黙った、妙に冷やかな眼差しでじつとながめるようになっていた。

ときには、晩酌をたしなむ母と、ひとつ食卓にならぶことさえ敬遠するふうをみせた。

「良。早よう食べ。お母ちゃんがごはんついでだけで」  
などと言って、まつをはが自分のそばに坐らせようとしても、

「まだごはん食べとらない。ぼく、あとで食べる」

と、良治は、ぶいと座をたって、茶の間をでていってしまうのである。

「なんや、あの子は。まるで性わるな姑はんみたいやな



## 神戸の催物ごあんない

### <音楽>

- ▷エドモンド・ロス楽団演奏会  
3月8日 PM 6:30 入場料金/¥2000 A¥1800  
B¥1500 C¥1300 D¥1000 E¥800 主催/神戸新聞  
開会館 於神戸国際会館大ホール
- ▷ウィーン・フィルハーモニック弦楽四重奏団  
3月12日 PM 6:30 曲目/ハイドン「ひばり」ベ  
ートヴェン「ラズモフスキー」シューベルト「死と少女」  
入場料金/会員券 ¥1000 労音3月例会 主催/神戸  
労音 於神戸国際会館大ホール
- ▷ボサノバをあなたに  
3月13日 PM 6:30 出演/武井義明 演奏・小原重  
徳とブルーコート 民音3月例会 主催/民音 於神  
戸国際会館大ホール
- ▷坂本スミ子ショー  
3月14日 PM 6:30 共演/ジュニア坂本 入場料金  
/一般 A¥750 B¥650 会員 A¥550 ¥450 主催  
/神戸職域連盟 於神戸国際会館大ホール
- ▷デューク・エイセスと真木利一クワレット  
3月15・16日 PM 6:30 労音3月例会 主催/神戸



俳優座公演「三人姉妹」より

労音 於神戸国際会館大ホール

### <演劇>

- ▷俳優座公演「三人姉妹」  
3月18・19日 PM 6:15 20日 PM 1:30 出演/平幹  
二郎 河内桃子 岩崎加根子 栗原小巻他 労音3月例会  
主催/神戸労演 於神戸国際会館大ホール
- <美術と写真>
- ▷吉川観方風俗画懐古展  
2月29～3月6日 作品20点 於そごう百貨店8階画廊
- ▷世界ゆうもあ彫塑—寺田竜左右作品展  
3月15～20日 世界の童話をテーマにした焼きもの20数  
点 於そごう百貨店8階画廊
- ▷明治百年にける民族の華「松百景展」  
3月8～13日 柴仙流のいけ花 於そごう百貨店6階催  
し会場
- ▷林総アメリカンフットボール写真展  
3月21～4月2日 作品30点 於三菱ホームコーナー内  
三菱ギャラリー

いか。お母ちゃんはな、お父ちゃんが早よう死んでやつたさかい、ひとりでいそがしうていそがしうて、お酒でものまんことには、このからだが持たんのや。それがわからんのか、あの子は——」

まつをは、独りごつように言っていた。

だが、良治は、そうした母親の気持ちを理解してやろうとはしなかった。彼のかたくなな態度は、年を経るにつれていっそうふかまっていくようであった。

まつをの酒量も、依然として衰えをみせなかった。そのせいか、彼女のからだにはいちだんと脂肪がふえ、体重もかるく十七貫を越えるようになった。

「まつをはん。あんた、このごろ、ちょっと肥えすぎやで。酒の量を落したらどうや」月末になると酒代の集金にくる紀州屋も、さすがに案じ顔で言った。ちょうどまつをは、白い粉薬をにがそうな顔をしながらのんでいた。「それなんの薬や？」「頭痛散や」

まつをは、こともなげそうに答えた。

「あたしも年のせいやろかなあ。このごろ、よう頭痛がしてな。この頭痛散、はなされへんのや」

「頭痛で、あんた、もしかしたら血圧でも高いのんとちがうのか」

「ふん。御崎薬局はんにもそう言われた。頭痛散はっかりのまんこ、いっぺん、お医者はんに診てもろうたほうがええ言うてなあ」

「そうや。あんた、県病院へでもいって、よう調べてもろうたほうがええで」

「けど、あんた、頭痛以外には、からだじゅ、痛いところも痒いところもあらへん。こらんのとおりのピンピンや」

まつをは、紀州屋の杞憂を一笑にふした。

「紀州屋はん。これでもまだ、もうひと花咲かせようかと思うてまんねやで。かわいそうに。人をそう病人扱いにせんといて」

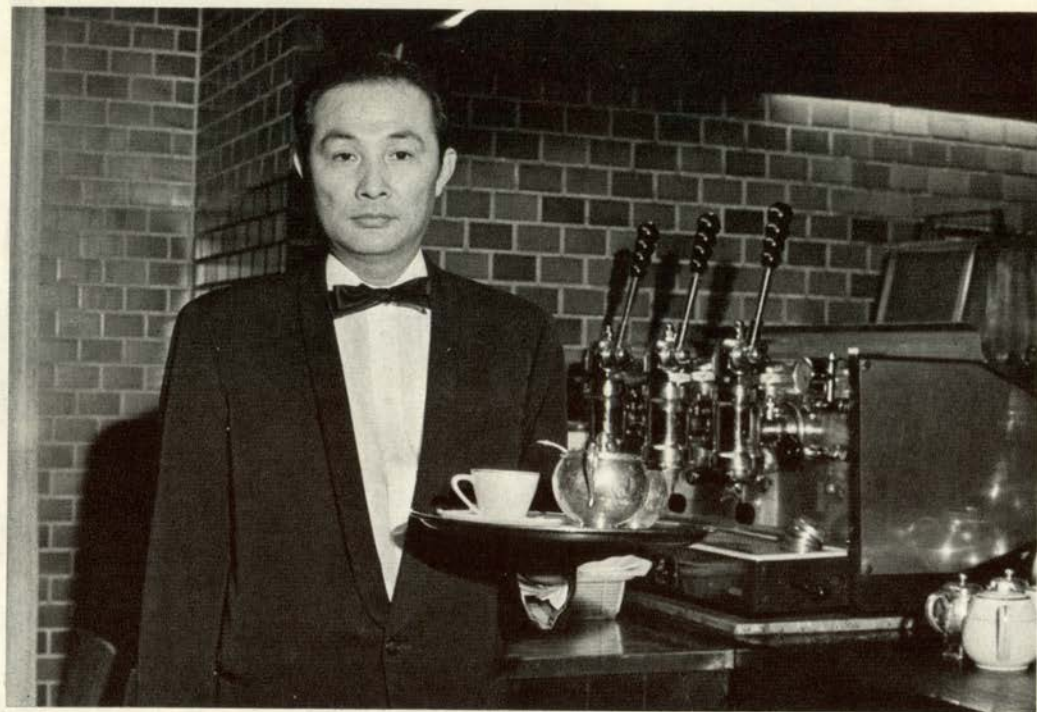
「いや、なんでもないんなら、そら、結構やけどな。しかし、酒の量だけでも、もうちょっと落したらどうや？」

「酒屋はんがそんなこと言うたら、あんた、商売があつたりやないか」

まつをは、この紀州屋の忠告もきき流していた。

しかし、彼女が、からだを保たせるためだと言っていた酒が、そのじつ、どのように彼女の肉体をむしばんでいたか、そのときのまつをはは想像してみようともしていなかった。





## この腕を売る

長谷川利男氏

オリエンタルホテル食堂課  
コーヒーショップ係長

コーヒー色の外装のオリエンタルホテルの地階、外装と同じコーヒー色に包まれたコーヒーショップがある。このコーヒーショップの責任者がこの人。

昼食時など、入口に立って、「いらっしゃいますか」とメニューをもって立っている。彼のいうことを聞かなかったら、ドツかれるのではないかと思う程の巨漢である。フランスあたりの古いレストランのウェイターが、かくありしかと思われる。常連の評判は「気はやさしくて」となかなか良い。コーヒーショップに行つて、彼がいなかったら、何となくもの足りぬという客もあらわれた。

五〇〇円(サービス料別)というランチなど、一切が格安なのも魅力。自慢はイタリーからもちこんだ機械で作るエスプレッソコーヒー(一五〇円)普通のコーヒーより濃く、通に評価が高い。毎日一杯は飲まないとおさまらぬというファンもいる程のエスプレッソコーヒー。コーヒー通なら、一度は足を運ばねばならぬ義務もあらうというもの。

(午前九時より午後八時まで営業)

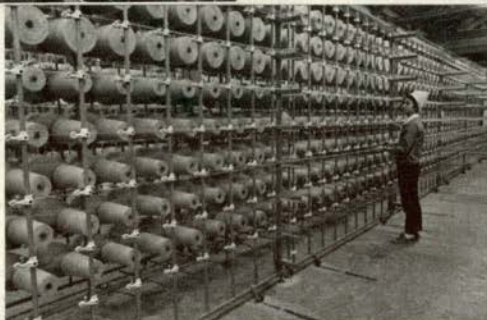


ダイナミック神戸  
小泉製麻の巻





◀東バキスタンやタイから輸入された黄麻の原料は繩を切って開巻され、纖維をやわらかくする軟織工程をおとて、櫛けずり綿状(カード工程)になる。左の写真はドローイング工程にはいり、纖維を同じ方向にそろえて燃りをかけ(精紡)て糸が出来あがってゆく。



▶精紡された糸が、チーズ巻や、かせ糸などの形に巻かれ、あるものは製品として倉庫に、あるものは3本燃り、5本燃りなどにするため燃糸工程へ、またあるものは織布工程へ送られる。

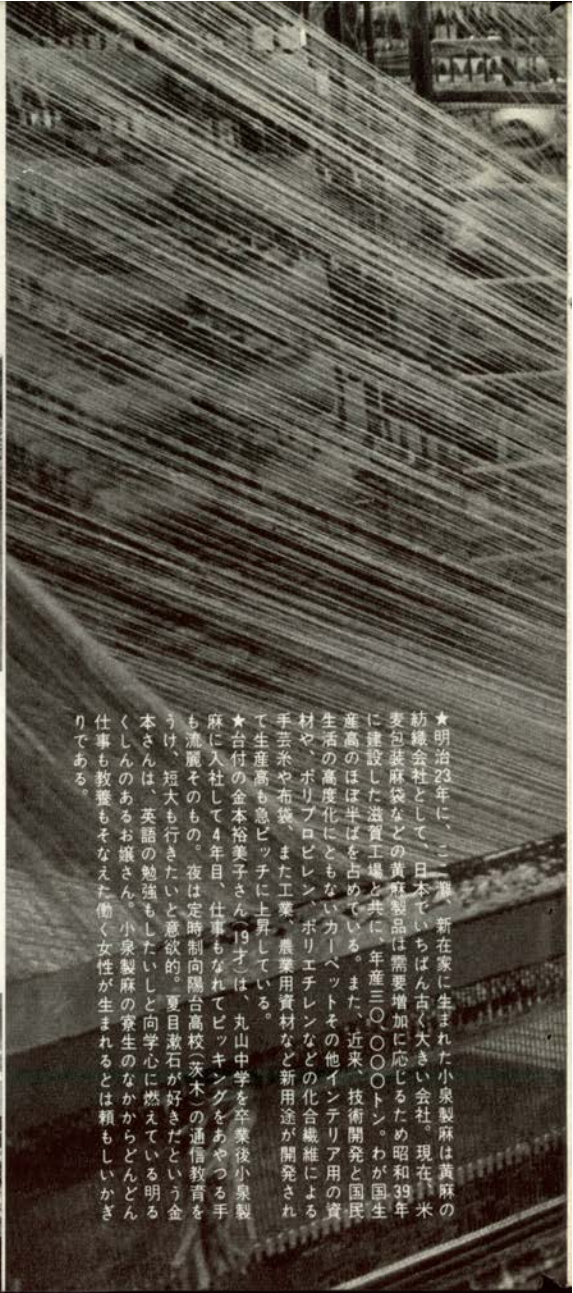


◀6m 40cmという広い麻布が七八〇台の織機で次々に織りなされてゆく。麻の独特の匂いがツンと鼻をつく。どうしても女性がこの職場で重宝されるのときけば、女性の手先きの器用な細やかさと忍耐力は、男性も及ばないそうだ。白い帽子が工場の中を走り活気と緊張感がみなぎる工場はダイナミックだ。



▶二〇〇〇人の従業員のうち女子が一六〇〇名という女性王国の小泉製麻。七百人収容の大食堂へ「食事がいちばん楽しいの」とおっしゃる女性が集まるのだから圧巻。しかし、清潔な白い帽子にお白粉っ気なしの素顔は、輝やかばかりの美しさだ。

(本文37頁参照下さい)



★明治23年に、二一歳 新在家に生まれた小泉製麻は黄麻の紡織会社として、日本でいちばん古く大きい会社。現在、米麦包装麻袋などの黄麻製品は需要増加に際するため昭和39年に建設した滋賀工場と共に、年産三〇〇〇トン。わが国生産高のほぼ半ばを占めている。また、近來、技術開発と国民生活の高度化にともないカーペットその他インテリア用の資材や、ポリプロピレン、ポリエチレンなどの合成纖維による手芸糸や布袋、また工業、農業用資材など新用途が開発されて生産高も急ピッチに上昇している。

★台付の金本裕美子さん(19才)は、丸山中学を卒業後小泉製麻に入社して4年目、仕事もなれてビッグをあやつる手も流麗そのもの。夜は定時制向陽台高校(茨木)の通信教育をうけ、短大も行きたいと意欲的。夏目漱石が好きだという金本さんは、英語の勉強もしたいと向学心に燃えている明るくしんのあるお嬢さん。小泉製麻の発生のなからほとんど仕事も教養もそなえた働く女性が生まれるとは頼もしいかぎりである。

ちゃんこ鍋とお酒と

悟味酉ご自慢の、鶏肉のたっぷり入ったちゃんこ鍋は、それだけでもお腹がいっぱいになりますが、それに民芸風の徳利の熱燗を一本……お店を出る頃には、頬もサクラ色になって最高の気分です。

河井 実

〈日本勧業銀行・当座預金勤務〉



ちゃんこ鍋一人前 500円

★姉妹店

お茶漬・おむすび・鍋もの

ふる里

生田前筋 <33> 5 5 3 5

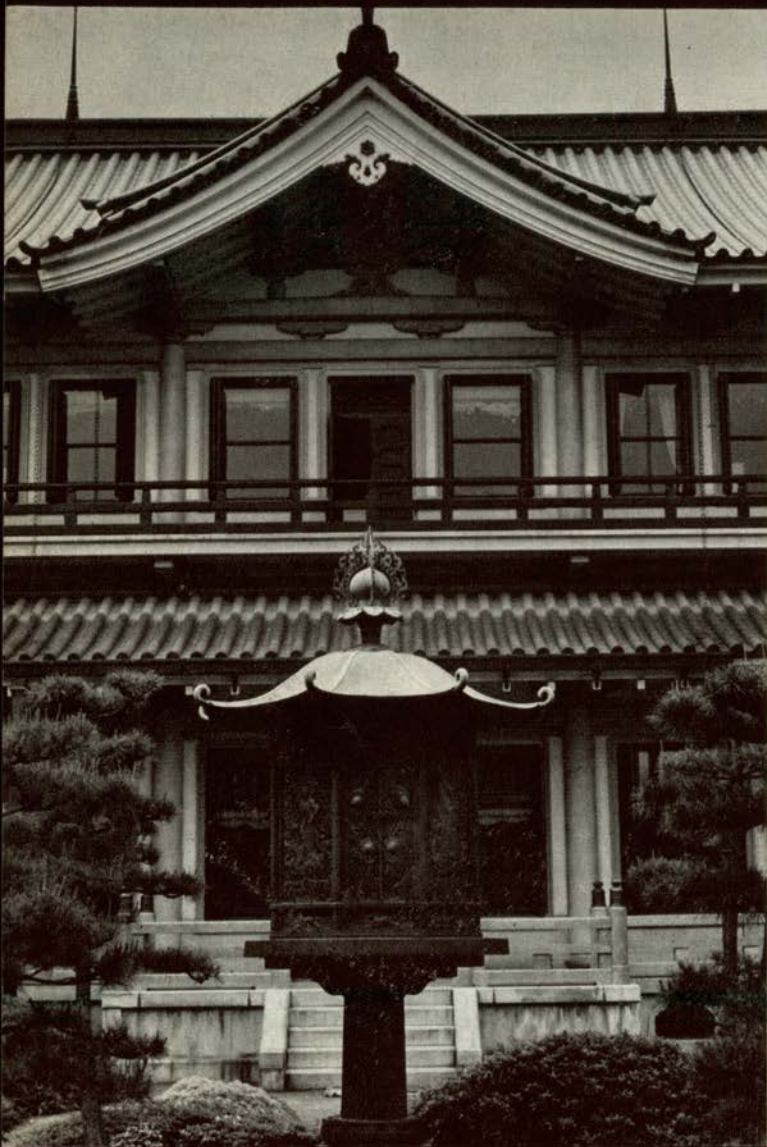
お茶漬・おむすび・鍋もの

悟味酉

阪急西口 <33> 3 8 4 8

鍋もの 悟味酉

炉ばた 阪急西口 <33> 3 8 4 8  
<2階>



# こうべ ろまん

<3>

白鶴美術館


文  
——  
陳舜臣

カメラ  
——  
緒方しげを  
一ノ瀬元子

白鶴美術館は、住吉道の山を背に、ひっそりとたっている。それでいて、けっして  
苔むした隠居所じみでないところがいい。桃山ふうのけんらんたる建物を、山のふ  
もとに据え、おのれの理解者だけを待つといった風情がある。庭の燈籠は青丹よし奈  
良の都をコピーして、われわれはそこに歴史を膚でかんじとる。灘の生一本「白鶴」  
酒造の先代、鶴翁嘉納治兵衛氏の古稀を記念して創立されたのが昭和六年。館も歴史  
をにじませはじめた。

白鶴美術館の所蔵品は中国の古美術品が多く、それも逸品ぞろいである。殷周の青銅器は、その表面に彫られた怪獣の眼を通じて、三千年のちのわれわれをみつめる。「コウへも開港百年だぞ」と語りかけるかのようである。百万都市にミュージアム一っないのは、まことにお恥ずかしい話だ。文化行政を徹底的にネグレクトしてきた神戸市は、この民間の美術館の存在によって、辛うじて面目をたもっているといえよう。



A black and white photograph showing the skeletal remains of a large building, likely a factory or warehouse, after a fire. The structure is mostly dark, with several rectangular openings where windows or doors once were. A bright sunburst effect is centered in the middle of the frame, casting rays of light across the scene. The sky is a uniform light gray, suggesting an overcast day. The overall mood is somber and desolate.

大正三年のシーメンス事件は、日本海軍の首脳の腐敗を白日のもとにさらした。贈賄がわのドイツ人の一人が、かつてここに住んでヘルマン屋敷と呼ばれた。この荒廃は空襲ではなくふつうの火事の結果だという。一種の業火であろう。ガイドブックの名所旧蹟にはのせていないが、歴史的事件を記念する建物だ。近所の子らは幽霊屋敷と呼び、射しこむ陽光は、華やかだった日々も所詮夢にすぎなかったことを、小うるさく念を押している。

No.1

●サンサカエ・ゴルフコーナー



マックグレガー・マンシングウェア・ラコステ



men's apparel

神戸元町2

33 7885

サンサカエ

●ゴルフウェアご紹介  
最近のゴルフウェアは、セミタートルが非常に多くなってきました。Vネックのセーターを合わせても良く、カーディガンなら、なお着易くて便利です。袖は長めが良く、パーマーなどは好んで、このスタイルを用いています。当店では、X Lのサイズまで商品を豊富に揃えています。  
(サンサカエ)

（仕事が忙しいのにゴルフなんて出来るものか）と思っていたのが同窓生の諸氏にこそわられた、仕方なしでかけたのが10年前。ついにゴルフの魔力にひかれて、こんな楽しいものはないという境地にいたった。特にこのメンバーは神戸二中の同窓生の悪友ばかりだから、気楽なことこの上なしのゴルフである。ロゲンカをしながら、仕事をはなれて、ひろいグリーン、空気のいいところでゴルフをやるのだから気分がいい。これからもケンケンガクガク。大いに楽しむつもりだ。  
〈中村義照〉

★同窓生同志の  
気楽なゴルフ

宇津隆平（料理旅館青柳経営）

薄木正敏（うすき病院院長）

室永昭二（室永洋服店経営）

中村義照（東京海上火災保険KK  
神戸支店中村代理店）



# 利殖の王様

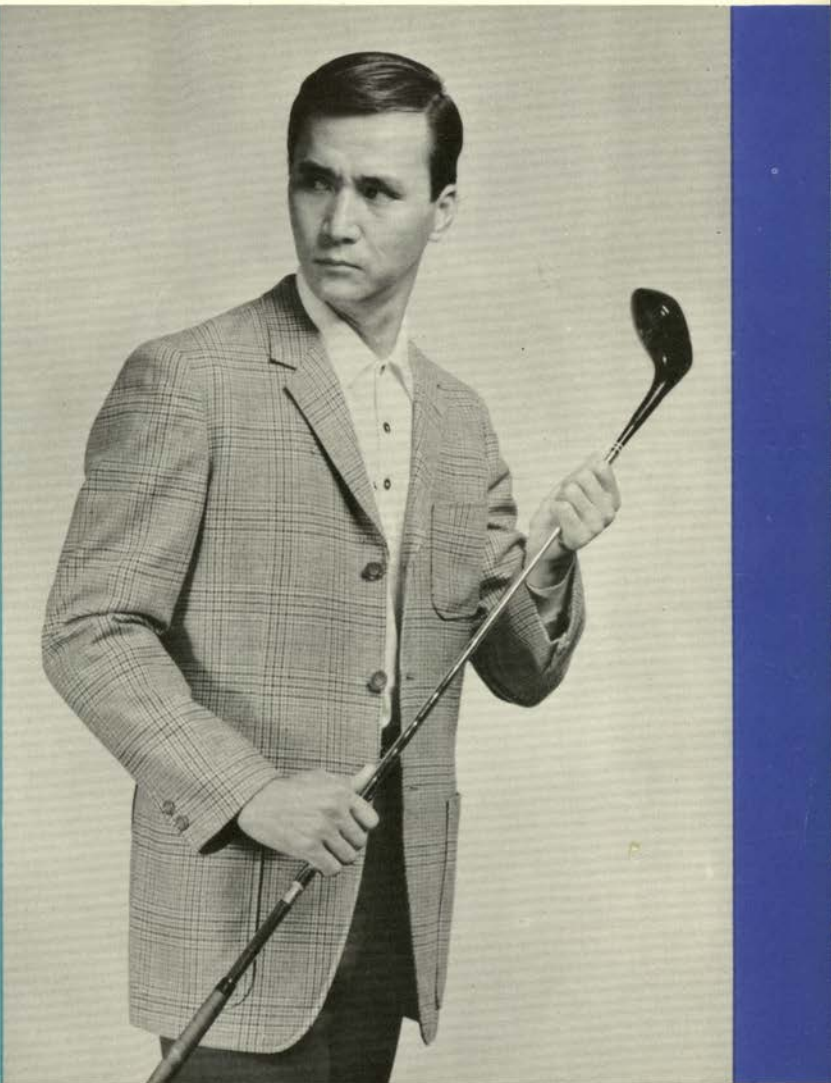


グングン  
ふえる！  
《ここうべ》の  
自動継続定期

満期になっても自動的に継続して  
毎日確実に利子がふえるので安心

## 神戸銀行





高級紳士服地

リファインマンウォールジャケットス

竹馬産業株式會社

神戸市生田区元町通三丁目四五三



昭和四十年一月二十日 発行所／神戸市葦合区八幡通五丁目九六（市役所前） K・Eビル四階 TEL②七〇三七 頒価一〇〇円  
第三種郵便物認可 昭和四十三年三月一日 発行 毎月一回 大日本印刷株式会社印刷 編集発行／小島 料12円